

ジョージ・A・バーミンガムの短篇小説「意中の娘」

八 幡 雅 彦

George A. Birmingham's Short Story, "His Girl"

Masahiko YAHATA

【要 旨】

近年、第一次世界大戦とアイルランドの係りに関する研究が盛んで、この戦争を描いたアイルランド文学作品が見直されつつある。北アイルランド出身の小説家ジョージ・A・バーミンガム (George A. Birmingham, 1865-1950、本名ジェームズ・オウエン・ハネイ James Owen Hannay) は、第一次世界大戦で従軍司祭として志願し、フランスで戦うイギリス陸軍に随行した。その時の体験は回想録『フランスの従軍司祭』(A Padre in France, 1918) にまとめられている。また第一次大戦とアイルランド独立戦争を題材とした短篇小説集『我々の犠牲者』(Our Casualty and Other Stories, 1919) を出版した。両作品とも兵士たちの人間性、死と向き合う心理を映し出した知られざる戦争文学の名作であると言えよう。短編小説「意中の娘」("His Girl") は『我々の犠牲者』に収められた1篇で、第一次世界大戦を題材としたユーモア、悲哀、人間性に富んだ作品である。バーミンガムの本質を示す作品として、また後世に伝えられるべき名作としてここに翻訳紹介する。

【キーワード】

第一次世界大戦 アイルランド 短編小説 ユーモア 悲哀 人間性

ホテルのラウンジには30人から40人の将校たちがいた。彼らは皆、私と同じように一日の大半をそこで過ごす羽目になった。中には運のいい連中もいたが。休暇を終えてフランスに戻る途中でこの惨めな場所で足止めを食うのは、私はこれで四度目だった。とんでもない時刻にベッドからたたき起こされて、ヴィクトリア駅から列車に詰め込まれ、まるで帝国の運命は我々が一刻の遅れもなく戦場にたどり着くことにかかっているかのように、出発港へと突き進

んで行く。ところが列車を降りたら船は3時間あるいは4時間経たないと出ないと知らされる。今回はそれが6時間だった。我々はホテルで、ロンドンにいられたらもっと快適なのにとがっかり落ち込んで、怒りに燃えながら座っていることを余儀なくされた。

私は誰か話しのできる人間はいないかとあたりを見回した。ヴィクトリア駅ではかすかに知っている連中を3, 4人目にしたが、何時間も彼らと一緒に過ごす気分にはとてもなれな

かった。私がちょうど散歩に出かけようとした時、肩をたたかれた。振り返るとデイントリーだった。私はことのほか嬉しかった。私はデイントリーと戦争の前からの友人同士で、いつも愉快的な仲間だった。彼は私に心の底から挨拶をした。

「こいつは運がいい」とデイントリー。「こんなところでおまえにお目にかかれるなんて。他に俺が知っている連中はひとりもないんだ。それに、とにかく俺はなによりもおまえと話しがしたかったんだ。ひとつ聞いてもらいたい話がある」

我々は、隅の座り心地が良い椅子に腰を下ろした。私はパイプに火をつけ待った。デイントリーは話のネタを見つけるのが実にうまい男だ。とてつもなく奇抜なことが彼の身には起こり、私の他のどんな知り合いよりも数多くの冒険を経験している。そのうえ話し好きだ。えてして面白い話がある連中は話そうとしなくて、逆に話好きな連中はつまらない話しかしない。デイントリーは例外だ。

「今度はどんな話だ」と私。「マスコミの連中が『お涙ちょうだい』と呼ぶたぐいのものか。それともユーモアか」

「一種のジョークだな」デイントリーは答えた。「しかし俺の妻は、今までに聞いたこともない哀れな話だと言っている。思い出だけでも泣けてくると言っている。どちらとも取れるだろう。俺はおまえがどう思うか知りたい。実は俺はその話をおまえに手紙で知らせて、どうしたらいいか教えを乞おうと思った。俺の妻もそうしたらと言ったが、あまりにも長い話なんだ。しかも教えを乞われたところでおまえも、他の誰もどうすることもできないだろう。おまえなら何かアドバイスしてくれるかもしれないが—俺の妻はそれを望んでいるのだが—実際のところどんなアドバイスも無理だろう。しかしおまえが話を聞いてどう思うか知りたい。妻の言う通りか、俺の言う通りか。おまえはシムコックスを知っていたっけ」

「シムコックスだって」と私。「あのウェックス隊の背の高い、青白い男か。あのとても

哀れに見える男か」

「その男だ。戦争が始まった頃、アルゼンチンかどこかの最果ての地から帰国して戦地に送られたんだ。今は大尉になっている」

「去年の突撃戦の少し前にアルバート通りで彼に会った。知り合いというほどじゃない。知り合いになるにはちょっと気難しそうな男だと思った」

「妻もそう言っている」とデイントリー。「まず俺たちのほとんどより年上だし、世界の最果ての地で羊を飼うか、牛の品種分けをするか、そこに住む連中と同じ仕事をやりながら20年間一人で暮らしてきたんだ。当然、イギリスの生活からはかけ離れていて適応するのが難しかった。特に大学や学校を出たばかりの若い連中の多くとはなじめなかった。彼らのほとんどがシムコックスと同じ隊だったんだ。とにかくちょっと気難しそうな男だったが、部隊の中ではきちんと任務を果たし司令官に推薦された。ソナムの戦闘で撃たれて危うく足を失うところだった。命からがらに助けられて、療養のために俺のところへ送られて来たんだ」

デイントリーはイングランド中部地方に立派な家を構えている。私の知る限り、昔は最高の住み心地の家の一つだった。その頃はデイントリー自身が主（あるじ）だった。彼の妻は魅力的な女性だ。現在は将校たちの療養所になっていて、デイントリー夫人が3人の看護師の援助を受けながら運営している。デイントリーは彼の妻と同じように熱心だったが、気に入らないふりをして、全部彼の妻のしわざだとこぼしている。

「まったく厄介このうえない」とデイントリー。「休暇で戻ってくる度に若造どもが暴れまわっている。しかも今は満杯だ。12人もかかえている。俺の居場所がまったくない。そのうえ俺が芝生の庭の端に作った小さな池をめちゃくちゃんにしゃがった。あのパット・シングルTONのクソ野郎が勝手にボートレースをやりやがったんだ」

「なに、パット・シングルTONがいるのか。俺はあいつが負傷したことは知っているが、お

まえのところに送られたとは知らなかった」

「パット・シングルTONはいつでもどこでも出沒している。俺はあいつにお目にかからなかったためしがない。それにあいつはいたずらの悪魔だ。あいつが、威厳のかたまりのスコットランド人女性の主任看護師にどんないたずらをしたか後で教えてやる」デイントリーはクスクス笑いをした。

「その話をするくらいならシムコックスの話聞かせてくれ。実際、俺はそちらの方が好みだ。泣ける話はいつも胸にこたえる」

「だが俺はシムコックスの話は泣ける話かどうか自信がない。確かにちょっと湿っぽいものはあるがな。とにかくお前にその話をしよう。俺の妻は、おまえだけがどうしたらいいかアドバイスを与えてくれる唯一の人間だと思っているから」

「いいだろう。しかしパット・シングルTONのいたずらはいつも俺を楽しませてくれる。あいつが看護師のベッドにアップルパイを敷き詰めたとでも言うのか」

デイントリーは再びクスクス笑いをした。そして私は彼の表情から、看護師はアップルパイのベッドよりももっとひどいいたずらに耐えたのだと推測した。

「じゃあボートレース絡みのことか」私は言った。「俺はおまえが、おまえの池に浮かべているものなど何一つ知らないから」

「確かに。庭師がやって来て浮草をすくい上げるための木の箱以外は何も浮かべていない。しかしシムコックスの話の最後の方にパット・シングルTONが登場してくるんだ。妻がおまえのアドバイスを求めているのはシングルTONについてなのだ」

「パット・シングルTONについてアドバイスができる人間などどこにいる」と私。

「シムコックスがどんな人間か知っていたら、病院を出て喜々として暴れまくっている若造だらけの家で彼が初めどれほど孤立していたか、お前も理解できるだろう。シムコックスがやって来た時にはパット・シングルTONはまだいなかった。しかしあいつ以外の連中も同じくらい

のワルだった。朝から夜までくだらない冗談の連続でいつも大ゲンカだ。俺の妻はそれを嫌がらないからいいものの」

「シムコックスはベランダの隅にひとりで座って苦い顔をしていたということだな」

「その通りだ。そして最初俺の妻は彼に何もしてやれなかった。もちろん最終的には…」

「最終的には彼女は、『あなたの胸のうちの秘密を教えて。そしてあなたの心の悲しみを私に打ち明けて』と彼を説得したということだな。おまえの妻ならきっとそうするだろう」

デイントリー夫人は非常に親切で、同情的な女性だ。私は彼女と話しをする時は何でも遠慮なくしゃべりたい気持ちになる。シムコックスのように内気で暗くて、美しい女性にはまったく慣れていない男なら簡単に彼女に屈し、その時彼の胸に秘めている愛でも他の何でも告白するだろう。

「分かるだろう」とデイントリー。「彼の足はほとんど動かなくて、歩きたくても歩くことができなかったんだ。デッキチェアに座っているしかなかった。そこで俺の妻は彼の話をも十分聞いてやるのが義務だと感じたのだ」

デイントリーは、彼の妻とシムコックスのために弁明をしているようだった。その必要はなかった。デイントリー夫人なら、シムコックスが本当に同情を求めていると思えば、彼が一日中椅子に座っていようが池で庭師の木箱に入ってレースをしようが、彼から話を引き出しただろう。

「とにかく」とデイントリー。「シムコックスが妻に話したのは一彼は後で俺にも話したので何の隠し事もないんだが一次の通りだ。彼はソナムの北の森のマメツツで前進攻撃している時に足を撃たれたんだ。そこは凄惨な戦場だった。俺たちの味方はそこに2日間いて再び退却しなければならなかった。その時、シムコックスはどんな状況に身を置いたか、おまえは想像できるか」

私はうなずいた。

「爆弾で空いた穴、粉々になった木の幹」私は言った。「降りかかる銃弾、あちこちで爆発」

「それでもシムコックスの味方の連中は無事で、しばらくそこにいたんだ。地面は、ドイツ軍が退却する時と、後で俺たちの味方が退却する時に残していったいろんな物の残骸が散乱していた。武器やライフル銃やその他の装備品が散らばっていた。他のおぞましいものに加えて」

「それ以上詳しいことは言わなくていい。想像がつく」

「俺がそんなこと言うのはな」とデイントリー。「あたりに散乱しているものがシムコックスの興味を引いたんだ。奇妙なことに、そのような状況に置かれると人間はそんな気持ちになる。シムコックスが一番したかったのはまわりを片付けることだったらしい。彼はいろんな物を拾ってどこかへ取っておきたいという強い欲求にかられたんだ。もちろんそんなことしている暇はなかったのだが、ひとつだけ、煙草ケースを拾い上げたんだ。彼はそれを俺に見せてくれた。長い形をした、平らな白のメタルケースで、兵士たちは30本煙草がもらえるのでそれに入れて持ち歩いているんだ。シムコックスはどうしてそれを拾い上げたかわからないと言っている。少なくとも欲しかったわけではない。彼はただそれが地面にあるのを見てポケットに入れたんだ。ちょうどその時撃たれたんだ。榴散弾が膝の下に当たった」

「その戦いは覚えている。俺たちの軍は再び退却したんだな」

「その通りだ。そしてシムコックスはひとりそこに取り残されたんだ。もちろん彼は歩くことができなかった。しかし爆弾であいた穴まで這って行き、そこに横たわったんだ。それで次の2日間は、その森はドイツ軍にとっても俺たちの軍にとっても決して健全な場所ではなかった。俺たちの軍は榴散弾をまき散らしたのでドイツ軍は戻ってくるができなかった。同じ理由で俺たちの軍も前進することができなかった。シムコックスはただ爆弾であいた穴に横たわっていた。どうにかこうにか足を縛り上げた。ブランドーの瓶と非常食の缶詰を持っていた。しかし煙草はあまり持っていなかった。煙

草ケースに残っているのは2本だけだった。しかしもう一つのケースがあった。彼が拾ったやつだ。その中には20本近くあった。それから…ここから話は湿っぽくなるのだが」

「気にするな」と私。「続けてくれ。煙草ケースには他に何が入っていたんだ。愛する妻への別れの手紙か。それとも可愛い恋人への愛の言葉と聖書の一節か」

「もっとましなものだ。ひとりの娘の写真だ。シムコックスは話しをする時その写真を俺に見せてくれた」

「美人か」

「とても美人だ。クルツとした、優しそうな魅力的な瞳。おとなしい無垢な顔。それから口は…」

「話を理解するためにはその至福の喜びに触れることが必要なんだな。でなければそれは省略してもいいぞ」

「それを省略することは無理だ」とデイントリー。「話の要点は、彼女がどんな娘かをおまえが理解することにかかっている。『哀れを誘う』というのがピッタリの表現だ。か弱く、寂しそうで、しかし最高に魅力的で、悪の世界から彼女を守ってくれる、強い、男の中の男を必要としているかのように写真の中からじっと俺を見つめていた。何か仮装をしていてそれがまた魅力を引き立てていた。そこで何が起きたのか、妻は分かるというのだが、俺は完全には分からない。しかしシムコックスは娘に、いわゆる『恋』をしたんだ。ただ彼はそういう言い方はしなかった。並みの娘ではない、恋以上のものを感じたと言うんだ。血と肉を持った存在というよりも、この世のものではない神々しい存在だと」

「天使ということか」と私。

「そのようなものだ。分かるか。爆弾の穴に横たわっていた時、その娘はシムコックスの心を捉えて離さなかったのだ。夜、星が出た時にはシムコックスは娘がじっと見つめてくれていると夢想したんだ。昼間は横になってずっと娘を見続けていた。もうおしまいだ、これ以上生きられないと思った時、娘の声を聞いたとい

う。妻がここのところを語っているのを、俺はおまえに聞かせてやりたいくらいだよ。シムコックスは俺に語るときはぎこちなかった。しかし妻には朗々と語ったようだ。彼はもしその写真がなければ心がくじけて死んでいたと言っている。俺はそんなことなかったと思うが、彼はそう信じている。とにかく彼は死ななかった。最後まで生きながらえて、足も思ったほど悪くならなかった。彼を助けてくれたのは、この、この…」

「舞い降りてきた天使か」と私。

「おまえが天使と呼びたいければそう呼んでもいい」

「心から泣ける話だな。むごたらしい部分の話はもういいから先を聞かせてくれ」

「いいとも。爆弾の穴で彼が他に体験したことはカットしよう。しかしそれは、いいか、俺の妻が語る様子からして、とても興味深くて恐ろしいほど詩的な体験だったが。2日後、俺たちの軍が森に戻って来てそこを占拠した。担架兵が爆弾の穴でシムコックスを発見して戦傷者収容所に担ぎ込んだ。そこから、くだんの通り、彼は病院行きになった。最初その病院にいた時、それからロンドンの病院に移った時、彼はまったく気分がすぐれなかった。徐々に彼は写真の娘のことをまともに考えるようになった。神々しい存在だとみなすことはなくなって、普通の娘だと思ふようになった。しかし当然、特別の存在だと思った。彼はぞっこん恋をしたんだ。本当に写真に恋をするなんて考えられるか」

「とにかくシムコックスは恋をしたんだ。だからその点について議論する必要はない」と私。

「もちろん可能性としては」とデイントリー。「彼女は他の男の恋人か、ことによっては他の男の妻だったかもしれない。しかしシムコックスはそんなことどうでもよかった。彼はその娘を手に入れること以外眼中になかった。シムコックスのように暗くて内気な男は手が付けられなくなるらしい。とにかく俺の妻はそう言っている。のめり込んだらおしまいだ。シムコックスだったら、もし娘が大主教と腕を組んでい

るところを見たとしても奪い去ってしまうだろう。もちろん悪い足をかかえて入院している間はイギリス中娘を探して回るなどできなかった。しかし歩けるようになったらすぐに、娘は誰なのか、どこに住んでいるのかを見つけ出そうと心に誓った。手掛かりはほとんどなかった。実際皆無だった。写真は煙草ケースのサイズに合うよう小さく切られていた。だから撮影者の名前さえなかった」

「広告を出すこともできただろう。その手のことを扱っている新聞がある。身元捜索のために『戦場で発見』という写真を複製して載せている新聞がある」

「俺の妻もそれを考えたんだ。しかしシムコックスはその考えには乗らなかったようだ。その写真はあまりにも神聖なもので、新聞に複製して載せるようなものではないと言ったんだ。一般に公開されることを恐れていたのだと俺は思う。いいか、他の人間が、その娘と本当に関係がある人間が名乗りを上げたらどうする」

「じゃあ彼はいったいどうやってその娘を見つけようとしたんだ」

「俺は分からない。彼は妻に、直感が彼を娘のところに導いてくれるというような、ろくでもないことを言ったんだ。きっと彼の偉大な愛の力が彼を彼女の元に導いてくれると言ったんだ。俺に向かつてはそんなこと言えなかったが。しかし同情を寄せてくれる女性だったら、男はそんなことまで言えるんだな。俺の妻はそういう女性だ。しかし、それにしてもそんなこと考えるなんてちょっと頭がどうかしているに違いない。その娘に完全にイカレている。他のことはまともなのだが」

「そこまでイカレているとは信じ難いな。あてもなく出かける。そのつもりなんだな。そして偉大な愛の力の導きによって右へ左へと彷徨い歩く。どんなに頭がイカレた男でも、それでお目当ての娘に巡り合えるなんて期待するだろうか。もちろんどちらの方向に行こうと女性には会う。それは仕方がない。この世の中女性だらけだから」

「どういふつもりだったのか分からない。しかし俺の妻は彼に同情を寄せて、最終的には成功すると思ったようだ。最初のうちは、彼は恥ずかしがって妻に写真を見せることができなかった。しかし、妻が心から同情してくれていると知って、彼は妻に写真を見せたんだ。それで、妻は写真を見た瞬間、その顔を知っているように感じたんだ」

「それはシムコックスにとっては運が良かったな」

「いやそうじゃなかったんだ。というのが妻は娘の名前を思い出せなかった。妻はどこかでその娘を見たことがある、実際彼女をよく知っていると思ったのだが、ただ思い出すことができなかった。奇妙なことなんだが、俺が写真を見せてもらった時もまったく同じだった。一目見て俺はその娘に見覚えがあると言った。見れば見るほど、俺はその娘に会ったことがある、その娘かあるいはそっくりな人間に会ったことがあると確信するようになった。そしてとにかくそれは並みの顔だちではなかった。哀れなシムコックスは俺たちになんとか思い出して欲しいと懇願した。妻は来客名簿をめくった。俺の家は何年間もそんなろくでもないものを備えていたんだ。しかし思い当たる名前はなかった。俺はスナップ写真と素人が撮った写真が載った家にある古いアルバムを全部ひっくり返して見た。どれだけのものがたまってたか想像できるだろう。ありとあらゆるものだ。しかしその娘のことは分からなかった。それでも俺と妻はどこかで娘に会ったことがあるような気がした。そしてある朝、シムコックスが妻の小さな居間に駆け込んできたんだ。療養者は立ち入り禁止になっている場所だ。彼は恐ろしく興奮していた。前の夜にやって来た将校が写真にそっくりで、娘は彼の妹かいとこに違いないと言った。その夜にやって来た将校はひとりだけだった。思いも寄らないだろうが、パット・シングルトンだったんだ」

「パットか。悪魔のような若造だが、明るくて、いつも自信満々だ。おまえが言ったような娘があんな男と少しでも似ているなんて俺は思

いもよらない。おまえは、娘は悩まし気な、哀れを誘う、美しい天使だと言ったじゃないか。パットと叫ぶたら…」

「分かっている。しかしとにかく似ていた。俺はパットのことを思い浮かべながらその写真を見た瞬間、どうして見覚えがあるのか分かった。妻も同じことを言った」

「しかしパットには姉妹はいないだろう」

「いない。写真の娘と同年のようないともいない。俺はシングルトンの家族はよく知っている。何年も前から知っている。しかしシムコックスは、彼の愛する娘はパットとはなんらかの親戚に違いないと言い張るんだ。それでとうとう俺はパットに尋ねてみると約束した。なによりも、もし娘があいつの親戚だとしてもそんなこと尋ねるのは厚かましいし、もし親戚じゃないとしたら、パットはきっと俺と娘のことについてとんでもないデマをでっち上げてあちこちで言いふらすだろう。しかし妻は俺にぜひ尋ねてあげなさいと言った。それに哀れなシムコックスは恐ろしいほどの熱の入れようなので俺は約束した」

デイントリーは続けた。「それで俺は次の日の朝、パット・シングルトンを来させた。あいつは最初おとなしかった。それまで見たことがないほどおとなしかった。看護師にしたいはずらのことで俺から叱られるのだろうと思っていたんだ。あいつはうちに来て半日も経たないうちにいたずらしやがった。どんないたずらかは後で教えてやる。あいつがしおれていたのも無理ない。看護師自身にさんざんとちめられたんだ。それはもう恐ろしい女だ。しかし俺があいつに娘の写真を見せた瞬間パットと明るくなった。しょっぱな、いったいどこでその写真を手に入れたのかと俺に尋ねてきたんだ。それは、あいつが撃たれて怪我する前にどこかで無くした写真だと言ったんだ」

「ああ、それじゃあいつが持っていた写真だったのか」

「そうだ」デイントリーはにやにやしながら言った。「それはあいつのだったのだ。俺がどうやってそれを手に入れたのかあいつは無性に

知りたがった。もちろん俺は話さなかった。シムコックスを裏切るわけにはいかなかったから。それからパットは俺をからかい始めたんだ。娘に恋をしたかと尋ねるんだ。もし恋をしたと奥さんに言ったら奥さんに何と言われますかねえと言いやがるんだ。あいつはその写真を持ち歩いて仲間に見せてまわって、仲間が娘に恋をするのを試したかったんだ。十人中九人が娘をベタ褒めしたと言うんだ。あいつは俺にこんな美しい娘は今までに見たことがないでしょうと訊いてきたんだ。そして娘の名前と住所を知りたがったのは俺が最初じゃないと言うんだ。あいつは本当に胸クソが悪くなるニヤニヤ笑いを浮かべて、まだ誰にもその娘の名前を明かしていないと言うんだ。そして、ひとりぼっちだと何もできないような、愛しい、無垢な娘の尻を追いかけるほどあなたは馬鹿じゃないでしょうなどと言やがるんだ。パット・シングルトンのような奴からそのようなことを言われるのはそれ以上耐えられなかった。もし娘の名前と居場所を教えなければ取り返しのつかないことになるぞと俺はあいつをどなりつけた。おまえが看護師にどんないたずらをしたか報告するぞ、そうしたらおまえは軍法会議にかけられるぞとあいつを脅した。看護師をからかっただけで軍法会議にかけられるかどうか俺は知らないが、その脅しはパットには大きな効き目があった。実のところあいつはその看護師をちょっと怖がっていた。それも不思議じゃないがな。あいつが他の人間を恐れるなどというのは俺は聞いたこともなかったがな

デイントリーは話をやめて、ひどいクスクス笑いをした。

「ところでその娘は誰だったんだ」と私。

「おまえまだ分からないか」とデイントリー。

「いや分からない。俺が知っている娘か」

「正確には、俺はおまえが彼女を知っているとは言えない」とデイントリー。「おまえは彼を知っている。去年のクリスマスの時、基地でやった芝居で眠れる森の美女かフェアティマか何かに仮装したパットあいつ自身の写真だったんだ。あの悪魔の若造めが、その写真を持ち歩

いて出会う人間すべてをかつごうとしやがったんだ。腹が立つほどきれいな娘に変装しやがって」

「なんということだ」と私。「それでシムコックスはどう思ったんだ」

「シムコックスにはまだ話していない。そこが俺の妻がおまえにアドバイスを求めている点だ。始末に負えないだろう」

「とても始末に負えないな」

「もしシムコックスに真実を話したら、パット・シングルトンを殺そうとするだろう。そんなことになったら大ごとだ。かといって彼に真実を話さなかったら、彼はこれから先一生世界中をさ迷い歩いて後にも先にも存在しない娘を探し続けるだろう。そんなことさせるのも気の毒でしょうがない」

「俺の考えは」と私。「必ずしも写真とそっくりでなくてもいいから他の娘と出会わせてやることだ。同じくらい美人で、たおやかな、そんなタイプの娘と。しばらくしたら娘に惚れるだろう」

「俺も同じことを提案したんだ。しかし俺の妻は聞き入れようとしな。妻は、真実自体がすてきなロマンスじゃない、シムコックスが他の娘に鞍替えしたらロマンスが台無しになると言うんだ。俺には理解できない。おまえはどうだ」

「このような場合は、元の娘が女性ではなかった場合は…」

「その通りだ。しかし俺がそう言うと、妻は爆弾であいた穴に現れた天使の話の部分を引き合いに出して、すてきなロマンスはそれ自体が報いだと言うんだ」

「俺はなんとアドバイスしていいのか分からない」

「俺もそう思うよ。妻はおまえだったら何かアドバイスしてくれるだろうと言っているのだが。しかしこの話を聞いてお前は思うか聞かせてくれるだろう。俺はそれを本当に知りたかったんだ。泣ける話なのか、とんでもない茶化なのか」

「それはシムコックスの観点から見るか、
パット・シングルトンの観点から見るかにより
けりだな」

(使用テキスト)

James Owen Hannay (G.A. Hannay, pseud.),
“His Girl”, *Our Casualty and Other Stories*
(1919 ; rpt., New York: Freeport, 1970)

本作品の翻訳に当たっては、バーミンガムの
著作権者のひとりで、バーミンガムの曾孫にあ
たる Ms. Adelaide Taylor より許諾を得た。